

河野哲也著 『人は語り続けるとき、考えていない』

(岩波書店、2019 年) の書評

Review of People don't think when they keep talking by Tetsuya Kono, Tokyo,
Iwanamishoten, 2019

梶形公也 (大阪教育大学・武庫川女子大学名誉教授)

子どもの哲学を含めた哲学プラクティスの先導的な役割を果たしている河野哲也氏の「対話」に関する思索の優れた論考である。

目次を見ると、「対話」という事象に対する河野氏の関心と問題意識がどのようなものであるかがよく覗えるので、まず目次の紹介をする。

目次

序章 岐路の時代の対話と思考〔【 】は評者のコメントである〕

第1章 ソクラテスは問答で何がしたかったのか

第2章 思考とは何か (1) —— 情念と問い

第3章 思考とは何か (2) —— 対話との関係

第4章 私の中で誰が話し、だれが思うのか【刺激的な問いである】

第5章 対話する身体はどのように考えているか

第6章 合理性と非合理性、そして架け橋としての感情

第7章 対話・教育・倫理【序章で論じられた時代判断と対話的思考への反省から今あるべき教育の在り方を提言】

序章では現代の時代判断がなされ、人類は「環境問題」「人工知能」「社会の分断」という岐路に立たされているとする。そして、これら三つのものを生み出しているのが「近代的な知である科学と教育である」という判断をしている。この「近代的な科学と教育」への批判が、その後の諸章の論述を促している。この批判に基づき、哲学の取るべき視点を、専門家でもなく、職業や役割からでもなく、「ひとりの人間ないし市民からの視点」でなければならないと主張し、科学的専門化によって無用のものとされた対話の復権をめざし、対話による思考を再考察する。そして、対話の復権の現象はすでに現れており、それを「哲学カフェ」や「子どもの哲学」などの哲学プラクティスの興隆のうちに見て取っている。その後の各章においても、その最後にはこれらの哲学プラクティスへの言及という形で論述は展開していく。

本書の目的はこうして、「対話と思考の体験を記述し、それが進展する過程を明らかにし、最終的に人々の分断を回復する対話の文化を打ち立てることに貢献」することであるとされる。

第1章では、「対話」の、いわば、元祖であるソクラテスについて、彼が問答で何をした

かったのかを明らかにすることへと向かって論が進められる。その第1節で「子どもは哲学者」という言葉を媒介にして、「子どもの哲学」の由来を説明し、第2節ではこの子どもの哲学が「教師」にとって子どもと共に哲学することへの疑念と拒否感を生んでおり、それは哲学の「専門性」を否定することになるからであって、ここには哲学と対話の関係の本質がかかわっているとす。このことを、第3節では、「思考の民主化論」という言葉で説明し、哲学のいわゆる専門性を拒絶する。対話の過程では、「複数の人々が対話することによって、個々人では思いつかなかった新しいものが生まれてくる」。この事態は創発性という言葉で呼ばれ、対話の民主化論はこの創発性を育むことによって、これまでとは異なった新しい文化の創造を促す。それを、著者は「自由の文化」と呼び、それは「自らの死を前提に人生を企画する態度である」と主張する。ここにソクラテスのイメージが結び付き、思考の民主化という言葉は、専門家に対する素人というよりも、「子ども」に結び付けられ、子どもの哲学のうちに、哲学の根本的な態度である既存のもの（「大人」と呼ばれるもの）への批判的態度が表れている、と主張される。

しかし、著者はさらに論を進めて、第4節では、ソクラテスの「無知の知」の解釈を通して、批判検討を通して一層発達した知へと歩を進めていく探求の姿勢こそ現代の教育に求められている、あるいは推進すべきだと主張される。さらに、「知が本質的に分けることであり、分離と断片化を伴わざるを得ないなら、全体性の回復は知によっては得られない」ということを、ソクラテスは我々に自覚させようとしたのであり、「ソクラテスがやりたかったのは、学んだものを脱学習（アンラーニング）することであり」（著者はこれを「非知」の方へと呼ぶ）、とするなら、「対話は知の探究の過程であり」「知とされるものを脱学習すること」を目的としている。こうして、第6節、第7節では対話に対する著者の根本的な思想、あるいは出発点が示される。それは、簡潔に「私たちの人生は、対話のようである」というものである。対話においては、

「世界を眺め続け、問い続け、考え続ける過程自体に目的があり、価値がある。対話としての哲学とは、あらゆる思想の固定を取り払い、アイデンティティをつねに取り壊し、流動的な生を生きるための技法のことである。思考とは、どこかの結論に到達するための手段でもなく、知識を生み出すためのものでもない。つねに自分自身を取り壊し、新しくしている生のあらわれそのものなのである」。

そして、それが今ここで実現されているのが、まさに「子どもの哲学」なのだというわけである。

第2章、第3章では思考とは何かを追求する。第2章では先ず、思考と推論とを区別して、さらに思考は問題解決のための行為であるとして、教師主体の現在の教育の在り方が批判され、それとの対比で子どもの哲学の対話的思考が紹介される。そして、古代ギリシャの有名な言葉、「驚きの情こそ哲学の初め」と同様、驚きこそ思考の開始であるとして、この驚きの情念と思考との関係に注目する。そして、デカルトの言葉、「愛や憎しみ、欲望、喜び、悲しみという他の情念に先立ち、驚きこそが第一の情念である」という指摘に同意する。つまり、思考とは「自分が驚いた状況に対して何らかの新しい方策を生み出して対処しようとする行動であり、それは「自由への希求を動機としている」のである。これを教育の場面に移して、著者は「子どもに対する思考を支えているのは、子どもへの情念で

あり、子どもについて考えようとする人は、繰り返し子どもを思い出し、そのときの感情を賦活させようとするだろう」と語っているが、評者は、著者の驚きの情念との関係を考慮すれば、子どもについて考えようとする人は、常に子どもとの関わりに驚きを抱き続ける人だと言いたい。それは、子どもの哲学との関係で言えば、著者も指摘しているように、「子どもが哲学の問いに魅了され」ていることに魅了されているということであろう。

第3章はこのことを受けて、思考と対話との関係が論じられる。前章では哲学的な問いとして、What, Why, How が取り上げられたが（この書評では省略したが）、本草ではそのうちで、What と Why を取り上げられる。「何か」という問いは、通常本質を問う問いであるが、著者はさらにその根拠へと遡って、この問いを説明する。「何か」に対して、「～である」という回答は、通常問われた対象の有用性、あるいはそれをどう取り扱うかということを示しているが、それだけでなく、どう取り扱うかが不明な状況では、「どうそれを分類するか」ということになり、結局「何か」という問いは、その対象を所有したいという欲求があると説明される。しかし、その欲求は必ずしも満たされない、むしろ「何か」という問いは、常にその欲求に抗うものがあることを示す。そして、著者は「何か」という問いは「この人間の矛盾した適わない情念に支えられている」のだと主張する。一方「なぜか」という問いは、原因と理由を問う。「原因は主に物理的・自然的な現象について言う」のに対し、理由は行為、ないし判断の根拠を問う。そして理由は通常、目的に関係し、意図的なものに関わる。評者は、理由はさらに論理的な関係について言われると考える。「三角形の内角の和はなぜに直角なのか」という問いは原因を聞いているのではなく、論拠を聞いていると考えるが、著者は、「なぜか」の内容の区別をするのではなく、むしろ、これらの内容が、それこそなぜ、「なぜか」のうちにあるのかを問う。例えば、「知的には病気の原因を理解し、それが発生したのは偶然であることを理解しながら、「なぜ病気になるのか」という一見すると不合理な問いが心に生じる。なぜ、このような原因と理由の混同が生じてしまうのだろうか」。この問いの背後にはどのような情念があるのだろうか。それを、筆者は、「事象や事物が成立している存在根拠とその必然性を問いただきたい」からであると解釈する。つまり、「世界と自分を確かな必然性の中に位置づけたいという欲求と、そこから自由になりたいという矛盾した欲求が、両極として同時に編み込まれているのが、「なぜか」という問い」なのである。そして、まさに子どもの問いがこのような理解へと筆者を誘っているのである。

私たちは、確かに、「何か」そして「なぜか」と問い、その解を求める。しかし、仮にその解が与えられたとするとどうなるのだろうか。むしろ、この問いは解が存在しないということが本質ではないのか。私たちは、問うて解を求めつつ、その解をさらに問い続けるという矛盾した欲求のうちに生きている。それを著者は、「私たちは解とともに生きるのではなく、問いとともに生きるべき」と表現する。

先に、思考とは問題解決の行為であると言われた。これをあらためて「経験」との関係で述べて、「思考は経験の進め方に合理性を与え、その努力を経済的にする。したがって、思考とは経験のための手段であり、その過程の一局面である」と記述される。しかし、思考の合理性は「あらゆるものを分離して、断片化してしまう」。そして人はその断片化された解決に固執するというネガティブな側面がある。こうして、思考の目指すところは問題の解決であるということが改めて指摘されると同時に、それとの比較において対話の目標

とは何かの記述が行われていく。ここでまた子どもの哲学に立ち戻っていく。

「哲学対話で重要とされるのは、相手の話を傾聴して、そこから得られた視点や立場から自分自身の考えを検討し、必要とあればそれを変える姿勢でいることである」。つまり、「哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる。それは他者との出会いにより、自分自身に距離をとっていく過程である」。これは何を言おうとしているのか。つまりは、対話の目標、目指すところは、問題解決ではなく、問題の新しい意味づけと参加者自身の解放・自由の創発なのである。対話の参加者は全体の中で自分の立場を改めて意味づけられる、これが先に言われていた対話の民主化論であった。

第4章以下は、実際に対話においては何が起きているかの分析である。第4章は「私の中で誰が話し、誰が思うのか」という評者にとっては非常に刺激的なテーマとなっている。前章では、思考は内なる対話なのか、思考そのものは自己内対話とは呼べないのではないかと、という問いに導かれて、思考と対話の関係と差異が論じられたが、本章では近代的個人概念の批判と対話の関係が注目される。このことを言葉あるいは言語、あるいは発話というものを介して、論述が展開される。

最初は統合失調症患者とオープンダイアログという治療方法の紹介をして、これが哲学対話と親和性を持つことが指摘される。ここでは、考え、話しているのは、デカルト的な「私」かという問いが発せられる。そして、「私たちは、話し続けているときには、考えてはいない」と、ここで初めて本書のタイトルが表明される。言葉は反射的に出てくるのであって、それはなぜかといえば、「言葉を話すこと」は、「表情や身振り手振りと同じように身体的なもの」だからなのである。私たちは「身体的で感情的なやり取りとして相手と話す」のである。話すことや思うことは「考える」というよりも「夢を見る」に近い。「夢を見る」という表現を使うのは、夢が、自分自身で作りに出して、自分の「内側」からきている感じがせずに、自分とは別の「(外から) やってくる」という言い方が適当に思うから。著者は次のように書いている、

「言語は貨幣のように公共的なものである。それは今手元にある現金が、たまたま私の手元にあるだけであって、どこから来てどこへ行くのかが分からないように、発話も貨幣のように使用者の間を流通しているものではないだろうか」。

「私たちの発話は言語という公共の道具を使用して成立するものである限り、私たちも個人も超え出ている。自分がある発話をして、自分の意図するところとは異なった解釈をされる。これは、自分がその言葉を用いている文脈と他者がそれを理解するときの文脈とが、それぞれ異なるからである」。問うべきは、「自分の覚醒時の思いが、夢のように外にあって「見る」ものではなく、自分で「思う」ものだと判断されるのはどうしてなのか」。

ということである。

ここで、自分の内言を自分が発したものと理解できないという状態にある統合失調症患者とオープンダイアログという治療方法が紹介される。一つだけ、ヤーコ・セイックラ、トム・エーリック・アーンキル『オープンダイアログ』からの引用を紹介すると「対話的な話し合いのほうが状況全体の意味をうまく理解できるのだ。人間が行動に踏み出す時に肝心なことは、参加者たちの「あいだ」に生まれる」ということなのである。

次いで、同じ事態を、「誰かが私の唇を奪って発話させている」という言葉で締めくくった一節で、発話を一種の腹話術的状态であるという論を展開し、さらに、ここから対話とポリュフォニー性として論を進める。元々は自分のものでない言葉（発話）が自分の言葉として語るができるようになるのは、「現在の聞き手との間でコミュニケーションが繰り返し成功した場合」なのである。ここでもセイクラの言葉を引用して、「患者自身を含む、医師と家族のミーティングの場では、患者の抱える問題は、患者だけに帰属される症状としてではなく、家族を交えた周囲の人々から多声的に意味づけがなされていく」という形で敷衍している。そして、言葉の possession の状態を「私の言葉は何者かに取り憑かれており、その取り憑いた何ものかたちとともに、また他の人へと指し向けられる。自己の自律性とは、したがって、自分のことを自分で専有できた、自分で自分を制御できた」と幻想することではなく、多声的な自分のあり方を自覚して、それらの声たちを敏感に弁別することに存する」というように表現する。そして、第4章の最後に、対話が持っている二重の効果を説明する。一つは、対話においては、全体的な共同性のうちで、自分が個であることを自覚するということである。対話においては、「他者から解釈されることで、自分から発した考えや思いが自分固有のものであることが自覚される。対話とは、自分と他人をつなげると同時に、自分と他人が異なっていることの価値を知る行為」なのである。あるいは、対話そのものが一つの個体として現象する。もう一つの効果は、すでに言及したように、新しさの発現である。「対話によって獲得される自己とは、デカルトの自己同一的な意識ではなく、更新する自己」なのである。評者としても、このことは子どもの哲学において本当に実感していることである。

第5章では、対話と身体との関係を、様々なアイデアや体験から紹介している。ここの論述は新鮮である。まずは、哲学的対話の身体として、その環境づくりのことが述べられる。これは、子どもの哲学の環境づくりと同じである。そして、評者には先述した哲学対話の問いの「何か」と「なぜか」とは違って、ここでは、「どのように」が最も重要であると述べているように思われる。哲学対話では、人と人が媒介なしに向き合えるということが、「どのように」にとって重要であり、直接向き合うことが、いわば、身体を媒介にして行われるというのである。そして、話すことは身振りであり、発話とはリズムであるということが論じられる。特に、評者はここで言われる同調ということに対して、その条件となる調律ということを言いたくなる思いに駆られる。論述は、さらに「歩く」ということと哲学対話の親和性へと転じていく。ここでは著者自身の体験から、「われ歩き、考え、対話す」という命題を、様々な思想家の「歩くこと」への思いから、導き出して、章を終えている。

第6章は、対話における合理性と非合理性の鋭い分析がなされていく。ここではその詳しいフォローはできないが、本書の最初は、思考の始まりは驚きの情にあるということで、持続的な感情としての情念を問題にしたのに対し、本章では、対話が成立していくための合理性を支えているのが、共感と愛という感情であると論じられる。しかし、対話においては対話者同士の離間も存在する。その間の矛盾を調整する働きを、著者は「笑い」あるいは「ユーモア」のうちに見て取る。著者はユーモアを、「他者にも自分にも等しく距離を取り、その弱さや愚かさ、みじめさを笑い、それでもそうした人間の業とか性とかをまるごと受け止め、肯定しようとする」感情と規定している。そして対話の中で、「共感とユー

モアによって他者を迎え入れることのできる人間が、唯一、合理性の中にとどまることができるのである」と結論づけている。

最終章の第7章では、「対話・教育・倫理」というテーマのもとに、まず、対話とその対話の行われる場所（トポス）の問題が論じられ、次いで、人間社会という大きな「探求の共同体」が考究され、最後に対話の持つ教育的意義について論じられる。紙幅の関係でこれらの論述を追うことができないのが残念であるが、この問題は著者の民主主義に対する基本的なイメージと結びついて、他の著作でも論じられていると思うので、本書とともにそれらの著作を参考にしてほしいと思う。